

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

平成6年10月31日

気 象 庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

雲仙岳では、溶岩の噴出率が7月から9月まで約3万m³/日で、それ以降さらに減少しているものの、依然として溶岩ドームは内的な成長を続けている。7月10日頃には第13溶岩ドームが成長を始めたが同月下旬には停止した。

火砕流は、これまでに西側を除くほぼ全方向に流下し、8月下旬には、火砕流が南西方向にも一時多発した。しかし、全体としては火砕流の流下距離は短く、発生回数も少なくなっている。

溶岩ドームの内的な成長に伴い、昨年11月以降溶岩ドーム近傍で活発な地震活動を伴いながら断続的に著しい地盤変動が観測されたが、現在は鈍化している。しかし、10月中旬以降傾斜変動に対応して山頂付近の地震の発生に周期性が認められるなど、小規模ながら新たな現象も見られる。

噴火開始以来の溶岩噴出率などの推移から見ると、最近の活動は、噴火活動の第2波の後期に位置していると考えられる。

しかし、今後も噴火活動は消長を繰り返す可能性があり、引き続き警戒が必要である。

なお、山体には火砕流堆積物が多量に堆積していることから、降雨による土石流にも一層の警戒が必要である。